

日本における仏教とエロス

窪田高明*

仏教では出家者に性的な禁欲を求める。在家者にも、不邪淫戒に見られるように一定の性的な抑制を求める。しかし、それはあくまでも本来的な原則であって、日本の仏教では性に対する規範的な抑圧は強いものではなかった。日本に仏教が伝わってきたとき、まず注目されたのは、その呪術力とくに国家を鎮護する力であった。時代が下がると、呪術力への要求は範囲を広げ、貴族社会を中心に密教が広がった。このような呪術力を重視する信仰は、世俗の価値規範は否定されるのではなく、その実現を助けるものである。浄土教思想は、現世の価値を否定して来世を欣求するものではあるが、自力による煩惱の消滅を求めることはなく、現世において欲望に支えられて生きることを前提として認めている。そこでは欲望は批判されるものの、否定されるわけではない。このような欲望の存在を認めてしまう姿勢は、日本の仏教の特質というよりも、日本の文化にそもそも欲望を肯定する姿勢があり、それが仏教の受容に影響したと考えるべきであろう。

このような姿勢の存在は、欲望を強く抑圧しないから、逆に欲望を強く意識することもない。性を強く抑圧することによって、それがエロティシズムの文化を生み出すとすれば、日本の仏教にはそのような展開が期待しにくいということになる。もちろん、日本にも玄旨帰命壇、真言立川流のような性を重視する信仰の存在したことは知られている。しかし、その影響は限定的なものであった

のではない。

したがって、エロスの問題を意識した仏教思想を宗派や教義に求めることは困難である。だが、個々の仏教者において、エロスの問題が重要な役割を果たした事例は存在している。

一休宗純(1394-1481)は、臨済宗大徳寺派の僧である。一般には頓知の一休として知られているが、それは後世の作り出したイメージであって、実像からは遠い。一休宗純は徹底的に反俗的な姿勢を貫き、その個性的な主張と表現を多くの詩に残した。その漢詩集が『狂雲集』である。一休は、形骸化した僧の在り方はなにより禪の精神に反するものだと考え、臨済の伝統を定型化した禅僧の像を激しく攻撃する。その結果、その主張は僧としての規範を逸脱する生き方に禪の自由を求めようとする。「住庵十日、意忙忙たり／脚下の紅糸線、はなはだ長ず／他日、もし君来たつてもし我を問わば／魚行酒肆、また淫坊」大意は以下のようなものであろう。僧らしい暮らしをしているとせわしない。色気がでてくるというものだ。あなたがわたしがどこに往ったのか尋ねてきたら、料理屋、酒屋、女郎屋あたりにいるだろう。「君」は寺の組織の中で重要な役割を担っていた養叟という僧のことであり、意図的な当てこすりでもあるのだが、それを否定しても持戒も破戒も克服しようとするが背景になっている。「狂雲(一休の自称でもある)、だれか知る、狂風に属することを」とうたい、絶対的な自由を打ち出す。だから「今夜、美人、もし我に約せば／枯楊、春老いて、さらにひこばえを生ぜん」これは有名な禅話を踏

* 神田外語大学教授

まえているが、若い女性に抱きつかれたら、受けて立つぞ、という姿勢である。しかし、このような一休の表現を、仏教におけるエロティシズムの重視の例としてとりあげることはあまり適切ではないように思われる。

その理由は、このような性的な自由を謳歌することは、エロティシズムそのものの主張ではなく、禪者の自由な境地を表現するための方法として利用されている側面が強いように思われるからである。しがって、エロティシズムそのものの内容は意外に乏しく、観念的である。壮年期までの一休の破戒は、宗教的な方法の一つなのである。（これは、一休が性的な行為を実際に行ったか否かという問題とは関係がない。）だが、晩年になり、一休は森女という盲目の女性と交流を持つようになる。「十年花下、芳盟を理す／一段の風流、無限の情／別れを惜しむ、枕頭児女の膝／夜は深し、雲雨に三生を約す」ここでは、性はすでに観念的な意味で捉えられていない。相手は単なる性的な対象ではなく、特定の女性として存在し、二人の共有する時間が過去、現在、未来と続いていく永遠の間隔の中におかれている。あらためて、禪で求められる自己の把握が、具体的なものでなければならぬことが思い起こされる。ここでは、性を禪の方法として追求する姿勢は後退し、自己と永遠なるものとの具体的な把握が浮上する。それが、狭い意味でいう禪の枠組みに収まるものであるかどうかは難しい。しかし、少なくとも禪が自己否定の運動の連続であるとすれば、一休の到達した在り方が、禪を裏切るものではないといえるだろう。

禪とエロティシズムはこのように結びつくことによって、禪の本来の力を回復することになる。だが、それは形式化した生き方との意識的で厳しい対立をとおしてのみ到達できる高みなのであろう。